

インターネットの言語空間における、グローバル社会に抗する者たちの連携
— 英国 EU 離脱と米国大統領選挙を手掛かりに読み解く —

Global cooperation among the anti-globalists in the Internet World
— What do the UK Brexit and the USA Presidential Campaigns tell us? —

加藤知子
Tomoko KATO

I. はじめに

2016 年は、6 月に英国が国民投票で EU 離脱を決意し、11 月には、TPP 反対で違法移民に厳格なドナルド・トランプが米国大統領選挙に勝利した。グローバル化の速度が遅くなるとの予感もある。

インターネット上では、英国国民投票前には、EU 反対であったマーガレット・サッチャー (Margaret Thatcher) 元英国首相の、英国議会でのスピーチ動画がアップロードされ、肯定的なコメントが付けられていった。EU 離脱派が、米国民に対して、大統領選において、暗にトランプ候補に投票するよう呼びかける動画も You Tube で公開された。

これら動画の内容の妥当性はともかく、このような動画公開／賛同者の声の広がりによって鑑みれば、インターネット上では、英国国民投票や米国大統領選挙の結果を待たず、既に勝敗は決していたと思われる。簡便な機器を用いて誰もが情報発信源になれる 21 世紀の現在、主流メディアが流さない情報を個々人が、国境を越えて連帯し発信していくことで、水面下のうねりを作り出し、それが噴出したのが英国 EU 離脱の決断であり、米国大統領選挙でのトランプ勝利であったとも言えるのではないだろうか。

本稿では、インターネット上の動画を手掛かりに、英国 EU 離脱派やトランプ氏支持者らが何を考えていたのかを探り、水面下で作り上げられた流れは如何なるものなのかを描き出すことを試みたい¹。

II. マーガレット・サッチャーに対する肯定的評価

マーガレット・サッチャーは、1979 年から 1990 年まで英国首相を務めた。任期最終期には保守党の中でも支持が得にくくなり、ついに首相辞任となったが、国営企業民営化、フォークランド紛争勝利などの政策から、保守派代表格と言われる。

サッチャーは欧州との緊密な関係には慎重な立場を取っていた。例えば、1990 年 10 月 30 日の英国議会において彼女は、欧州コミッションの勢力拡大に強く反対している²。選挙で選ばれたわけではないコミッションに英国議会は力を明け渡すべきではないというわけである。彼女のこのスピーチは、インターネット上の You Tube で複数公開され、25 年の時を経て、やはり彼女は正しかったなどのコメントが付けられている。

¹ ただし、英国 EU 離脱やトランプ氏米国大統領就任がもたらす実際の政治的・経済的影響についてはここでは論点にはしない。

² 1990 年 10 月 27 日と 28 日に、欧州カウンスルの会議 (European Council's meeting) がローマで行われたが、その直後、英国議会で、欧州コミッションについて自身の所感を述べたものである。

例えば、*Margaret Thatcher on Europe: "No! No! No!"*というタイトルで、2012年6月29日に公開された動画がある³。英語キャプションつきで、原スピーチの中から、サッチャーが欧州コミッションに対して強い警戒感を示した箇所を取り出しアップロードしたものである。視聴者コメント欄には、「デイビッド・キャメロンが彼女ほど有能だったら」(2016年3月)⁴、「彼女は素晴らしかった」(2016年3月)、「マギーは正しかった」(2016年5月)、「Brexit Yes!」(2016年7月)、「ヒラリーにどうすればいいのか見せてやって」(2016年7月)、「何と聡明な女性なんだ！いつも彼女が好きだった。我々は今こそ彼女が必要だ」(2016年10月)、「米国にはヒラリーではなく彼女みたいな人が必要だ」(2016年11月)、などの意見が確認される。そもそも、アップロードした本人が、*The EU Referendum - Its Time for Brexit*という動画へのリンクをコメント欄に載せており⁵、もともとこの動画は英国EU離脱支持者向けに、そして更なる離脱支持者拡大を目的に公開されたことがうかがえる。

10月30日の英国議会のサッチャーによるスピーチ中、EUに強く懸念を表している箇所を更に絞り込んで、*Margaret Thatcher No No No*というタイトルでアップロードしているYou Tuberもいる⁶。公開日は2010年12月5日で、視聴回数は2016年11月16日現在4,012,489回であり、英国EU離脱に対する関心の高さが現れていると言える。

こちらにも、「25年かかったかもしれないが、ついに我々はサッチャーに辿り着いた。そしてEU離脱を決意した、神に感謝！」(2016年7月)、「英国独立おめでとう、サッチャー」(2016年7月)、「ドナルドが米国大統領選に勝ったら、米国版Brexitパーティに招待するよ。自分の航空券だけ買ってこちらに来れば、英国マフィンを好きなだけ頬張ることができるよ」(2016年10月)、などのコメントが付けられている。

その他、サッチャーの英国議会での、首相としての最後のスピーチもアップロードされている⁷。その中で彼女は自分の主張を力強く述べており、EU反対立場について指摘された時には、ユーモアを以て応酬するなど余裕も見せている。映画『マーガレット・サッチャー 鉄の女の涙』で描かれたような、辞任前に四面楚歌の中で絶望する気配はまるでない。

しかしながら、辞任当時は与党内でも求心力が弱まり、英国全土で批判を浴びせられた感であったのも事実である。それと比較するに、21世紀の現在、彼女のスピーチに肯定的なコメントが次々と付けられるのを見るにつけ、隔世の感を禁じ得ない。

³ https://www.youtube.com/watch?v=tVt_1ByddUQ (2016年11月16日閲覧)、公開者は、Adam という You Tuber である。

⁴ 元のコメントは英語、日本語訳は本稿筆者拙訳。() の年月は、コメントが付された年月を表す。以下同様である。

⁵ <https://www.youtube.com/watch?v=D6pE5t46oKM> (2016年11月16日閲覧)、リンク先の動画も Adam がアップロードしたものである。

⁶ https://www.youtube.com/watch?v=Tetk_ayO1x4 (2016年11月16日 閲覧)、公開者は Kayee txxu である。

⁷ Margaret Thatcher - November 22, 1990 (Full Speech)

(https://www.youtube.com/watch?v=uF_GXMxa-mE) (2016年11月16日閲覧)

2013/04/09 公開、視聴回数 102,826 回(2016年11月16日現在)、公開者は Brian Young という You Tuber である。

あるいは、辞任当時でも彼女の支持者がいたのだが、主流メディアの世論に対抗する術がなく沈黙せざるを得なかったというだけなのかもしれない。その後、彼らがインターネットという手段を得、連携を探り、一人一人の声を束ねていくことで、英国を動かすことに成功したのが 2016 年 6 月の英国国民投票の結果だったと言えるのかもしれない。

サッチャーは保守派代表だと言われる。食糧雑貨商の家の娘であった彼女の生い立ちから判断するに、彼女が保守したかったのは自分と同じような環境で頑張る人々だったのではないかと思わされる。すなわち、彼らに、外国が軍事的脅威を与えれば軍事力で、英国自身が（社会主義化した）大きな政府の力で圧迫すれば新自由主義経済で、共産主義などのイデオロギーが押し寄せれば自由・民主主義の気概で、超国家的共同体（EU など）が封じ込めようとすれば英国主権と伝統・誇りで、立ち向ったのではないかということである。

このように見れば、サッチャーとは極めて一貫性のある政治家であったのだとも言えよう。タカ派や経済的新自由主義者と呼ぶよりは、国家が国家らしくあるにあたり、大切だと彼女が信じたものを守り抜く意志を貫いた人物だったと見るほうが、正確に彼女を描写することになるのではないだろうか。

サッチャー辞任 25 年後、英国では、個人・家族経営の商店が消え、最低賃金に近い給料で働くか、巨大企業を動かし巨万の富を得るか、の両極に社会が分かれつつある。しかも、その巨大企業はグローバル企業であり、それらの企業が抱える安い労働力とは続々と入国する移民なのだ。この現状に疑問と不安を抱いた人々がサッチャーの思いに賛同し、それを自身の判断材料の一部として取り込みながら、EU 離脱を決めたのではないかと想像できる。

Ⅲ. EU 離脱派と米国大統領選ドナルド・トランプ支持層との連帯

上記Ⅱでも言及したが、EU に慎重なサッチャーのスピーチ動画の視聴者コメント中、米国大統領選との関わりを示すものが見られる。サッチャーが保守しようとした、個人・家族経営の産業形態を核に、家族・友人・コミュニティが力を合わせて頑張る社会を理想と考える人々は、米国でも草の根の保守派層を形成しており、大きい政府やグローバルな圧力に対しては嫌悪感を持つ場合が多い。従って、英米両国間の連帯が生まれても不思議ではなく、21 世紀の現在では特に、インターネットという情報協働発信の手段も整っている。英米共に英語圏であり、言語上の隔たりはもともとない。自由民主という価値観でも両国は一致している。そもそも英国はマグナ・カルタの国なのだ。

パット・コンデル（Pat Condell）という You Tuber がいる⁸。英国や欧州政治についての動画を YouTube にアップロードしており、2016 年 11 月 19 日現在、チャンネル登録者は 284,200 人、視聴回数は合計 66,434,015 回である⁹。

コンデルは EU 離脱派であり、英国国民投票前の 2016 年 5 月 31 日に、*The Moment Of Truth* という動画を投稿し¹⁰、英国主権と民主主義を護るために EU 離脱を呼びかけている。また、英国 *Brexit The Movie* をその動画の中で紹介しているが、これは、英国 EU

⁸ コンデルはアイルランドのダブリン生まれである。

⁹ <https://www.youtube.com/user/patcondell/about> (2016 年 11 月 19 日閲覧)

¹⁰ <https://www.youtube.com/watch?v=JFt-pRIvL9E> (2016 年 11 月 19 日閲覧)

離脱の根拠を論じた動画で、You Tube 投稿者は Brexit: The Movie である¹¹。文字通り、英国 EU 離脱派が、自らの主張をインターネット上で開陳するために投稿したと判断される。こちらの視聴回数は、2016 年 11 月 19 日 現在で 2,568,518 回である。

コンデルは、米国大統領選挙前 2016 年 10 月 25 日に、*America's Moment Of Truth* という動画を公開した¹²。TPP 反対を掲げ、政治既得権者とは一線を画している（少なくともそのように見える）トランプを、暗に応援するメッセージである。視聴者のコメントは様々だが、高評価の筆頭は、米国大統領選直前に付けられたと思われる、「沼地を整地する時が来た!!!トランプに投票しよう!!!」である（2016 年 11 月 19 日確認）。

コンデルは無神論者で¹³、その点では、米国南部の草の根の宗教的な人々とは価値観が異なるが、自分で決め、できることは自分で行う、という自律・自治の精神では一致している。それを、巨大な宗教集団（現在の西洋ではイスラム過激派集団）や EU が脅かしていると判断した彼は反イスラム主義となり、また、EU にも反対しているというわけである¹⁴。

米国草の根レベルの国民も、自分たちの自律・自治が脅かされていると感じており、脅威の源である（と彼らが考える）、イスラム法の広がり、TPP 等自由貿易の枠組み、巨大化した、しかし、一般国民のためには何もしない（例えば、彼らの生活を圧迫している不法移民には有効な手段を打ち出せない）連邦政府に向かって、正面から切り込む政治家を望む世論が水面下で形成され、それが、コンデル作成の動画と呼応していると考えられる。

自律・自治の精神といえば、個人主義の英米、と連想しがちだが、自律・自治の精神を重視する人々は、欧州大陸にも少なからずいる。その中でも例えば、オランダ自由党のヘルト・ウィルダース（Geert Wilders）は有名だ。コンデルの You Tube サイト¹⁵の再生リストの中にも、ウィルダースの動画が含まれている。

ウィルダースは反イスラム主義の態度を表明しているためレイシストなどと言われているが、彼が反イスラム主義なのは、イスラム法がオランダの自治を圧迫していると彼が判断しているゆえである。自律・自治を護るために第二次世界大戦ではファシズムと戦ったオランダが、今や、オランダ自身ではなくイスラムの神の法によって治められようとしているのではないかと危機感を抱いているのである。

ウィルダースの公式サイト¹⁶では、2016 年 11 月 9 日付で、彼自らトランプ当選を讃えている。既得権政治家、TPP などを介した超国家的圧力、法を揺るがす不法移民（これらは皆、米国の自律・自治の精神と自由・民主主義を脅かすと考えられている）に対して強い態度を示しているトランプが、ウィルダースの政治信条と合致しているからであろう。トランプとウィルダースの、実際の政治的連携が叶うかは別として、少なくとも、インターネットの次元では、コンデルからウィルダースへ、ウィルダースからトランプへ、トラ

¹¹ <https://www.youtube.com/watch?v=UTMxfAkxfQ0> (2016 年 11 月 19 日閲覧)

¹² https://www.youtube.com/watch?v=sHCul_DIM_4 (2016 年 11 月 19 日閲覧)

¹³ GODLESS COMEDY (<http://www.patcondell.net/>) (2016 年 11 月 19 日閲覧)

¹⁴ コンデルは親イスラエルであるが、それは、イスラエルが自治の精神を重んじ、中東における唯一の民主主義国家であるからと彼が判断しているからである。

¹⁵ Pat Condell (<https://www.youtube.com/user/patcondell/featured>) (2016 年 11 月 19 日閲覧) の「作成した再生リスト」に、ウィルダースの動画がある。

¹⁶ Geert Wilders Weblog (<http://www.geertwilders.nl/>) (2016 年 11 月 19 日閲覧)

ンプから反 TPP へ、反 TPP から反 EU（や反 TTIP）、そしてサッチャーのスピーチへ、とサーフィンを続ける間に、ユーザー同士でコメントや情報を交換し、連帯感が強まっていく。そのうねりに気付いていた者にとっては、英国 EU 離脱も、トランプ勝利も、投票前から既に勝利は確実であったと言えるのではないだろうか。

IV. 結語

2016 年は、グローバル化に抗する人々が、言葉の矛盾かもしれないが文字通りグローバルに連帯し、国境を切り崩す波（ヒト・金・物・情報の自在な動き）を押し止めようとした年であったと言えよう。グローバル化に賛同するにせよ、反対するにせよ、地球規模の出来事を、あたかも地球の外側から自在に吟味するかのノウハウを身につけ、国境を越えての連帯ができるか否かが勝敗を分ける時代になっていることは疑いないと思われる。

気になるのは、EU 離脱とトランプ勝利の裏に散見される反ユダヤ主義的動きである。

英国 EU 離脱を主張するコンデルや、トランプ勝利を祝うウィルダース、ネタニヤフ首相を支持するトランプは親イスラエルである。彼らが護りたい、自律・自治の精神と自由・民主主義の、中東における体現がイスラエルだからというのが彼らの言い分なのであり、従って、彼らがナチスのようなはずがないのだが、彼らの主張を読み込むことなしに、現行の難民・移民政策に反対していることだけに注目すれば拙速に、彼らはナチスのような人種差別主義者に違いない、などというレッテルを貼ってしまうことになりかねない。そのような拙速さに乗じて、本物の反ユダヤ主義が暗躍するとも限らない。

実際、コンデルやウィルダースらの動画を見ていくと、彼らによる作成ではないのだが、反ユダヤ主義的色調の動画が、You Tube 推奨動画欄に立ち現われてくるのである。例えば、現在の欧州の混乱は、フランクフルト学派の文化的マルクス主義大衆版であるポリティカル・コレクトネスが一因であると主張されるが、フランクフルト学派にはユダヤ人が多く属していたため、現在の欧州の混乱の陰にユダヤ人がいる、とのコメントがインターネット上にしばしば見られる。また、難民・移民の流入は、ユダヤ人が推進しているという主張もインターネット上に広まりつつある。紙幅の関係上、インターネット言語空間に見られる反ユダヤ主義については、機会を改めて論じてみたい。フランクフルト学派への興味は高まっており、日本でも入門書（細見（2014）など）が出版されている。

英国 EU 離脱とトランプ勝利は、自律・自治の精神と自由・民主主義を根幹に据えた草の根活動の結果だと信じる英米国民や欧州人は多いであろう。英国や欧州、米国が、自律・自治の精神と自由・民主主義の保守に向かうのか、反ユダヤ主義的動きが強くなるのか、西洋諸国の草の根の市民の学識と教養、倫理が試されることになるだろう。望む・望まないに拘わらず、西洋の出来事は、いずれ他地域に波及する可能性がある。西洋がどの方向に進むにせよ、東洋にいる我々もその成り行きを冷静に見定めることが必要となるだろう。

参考文献

書籍

細見和之, : フランクフルト学派—ホルクハイマー、アドルノから 21 世紀の「批判理論」へ—, 中公新書, 2014.

オンライン

Uriel Heilman: When it comes to Jewish ties, no GOP candidate trumps Trump, THE TIMES OF ISRAEL, August 8, 2015.

DVD

フィリダ・ロイド, : マーガレット・サッチャー 鉄の女の涙, Happinet, 2014.